

教育的関係における受動的かつ非主題的な身体性の意義

：〈おのずと伝わること〉に関する現象学的一考察

大 塚 類

1. 受動的かつ非主題的な身体性に着目する意味

1-1 オンライン・コミュニケーションが教えてくれること

COVID-19の世界的流行により、私たちの対人関係は一変した。対面でのコミュニケーションは著しく制限され、会議、授業、飲み会といった対人関係のほとんどが、パーソナルコンピューターやスマートフォンの画面越しのオンライン・コミュニケーションへと移行した。こうした経験は、対面でのコミュニケーションが身体に由来する情報と意味にどれほど満ちていたのかを、再確認させてくれる。相手の表情や声色の些細な変化。頬杖をついたり、背中を丸めたり、貧乏ゆすりをしたりする全身の姿勢や動き。身じろぎ、ため息、「くすっ」というささやかな笑い声といった音にならない音。相手がそこにいることによって醸し出される雰囲気……。オンライン・コミュニケーションでは捨象されてしまうこうした膨大な情報と意味に支えられるかたちで、私たちは相手を能動的に理解し、円滑なコミュニケーションを営んでいたのだ。オンライン・コミュニケーションが「疲れる」と言われる理由のひとつは、本来ならば意識せずとも受動的に与えられる膨大な情報がないために、限られた条件のもとでできるだけ多くの情報を得ようと、意識を能動的に働かせ（すぎ）てしまうからなのだろう。

1-2 現象学における受動性・非主題性と能動性・主題性の関係

筆者が研究の理論的背景としている現象学（特にフッサール現象学）では、受動的かつ非主題的な意識の働き¹⁾が、能動的かつ主題的な意識の働きを基づけている（fundierung）、つまり、支えていると考える。例えば、何かを主題的に知覚したり認識したりする意識の働き（能動的綜合 aktive

Synthesis）は、自我の関与なしにおのずと生起する連合や触発といった働き（受動的綜合 passive Synthesis）を土台としている。身体に由来し受動的に与えられる膨大な情報と意味が能動的な他者理解を支えている、という上述の表現は、こうした現象学的思考に基づいている。

受動的かつ非主題的な意識の働きが、能動的かつ主題的な意識の働きを支えている、という考え方は、教育について考える際に新たな視点を与えてくれる。というのも、教育という営みはしばしば、教育する者から教育される者へ何かを伝えること（伝承・伝達）や、教育する者が教育される者をよりよい方向へ導くことといった、能動的な働きかけとして描かれるからである。しかし、こうした伝達や指導といった能動的かつ意識的な働きかけは、現象学的観点からすると、受動的かつ無意識的な働きかけ（働きかけてしまうこと／働きかけられてしまうこと）に支えられている。

能動的かつ意識的な教育を支えている受動的かつ無意識的な働きかけとは、発された言葉に付随する言語化されないニュアンスや、雰囲気を共有することで思考や感情が相手におのずと伝わってしまうことといった、身体性に基づく働きかけである。オンライン・コミュニケーションによって身体に由来する情報や意味が捨象されている現在だからこそ、コミュニケーションを支えている身体性について改めて考える必要がある。身体を媒介とする受動的かつ非主題的な言語化されにくい領域について考えることは、対面コミュニケーションの意義について改めて考えることにも繋がるだろう。

そこで本稿では、マンガ作品を事例として取り上げながら²⁾、教育的関係³⁾において身体が果たす役割について考察する。身体性に注目することで、身体を介して〈おのずと伝わる〉という受動的かつ無意識的な働きかけに備わる教育的意義を、明らかにできるはずである。

2. ラミーの物語

本稿で事例として取り上げるのは、『夜廻り猫』（深谷かほる、2017～、既刊6巻）である。さまざまな人生の機微を8コマで描く『夜廻り猫』のなかから、永沢家の物語を紹介する⁴⁾。永沢家は、動物好きでとても優しい父母と姉犬のラビ、そして、野良猫から永沢家の一員となった妹ラミーの4人家族⁵⁾である。父母の愛を一身に受けてすくすくと育ったラビとは対照的に、野良育ちのラミーは、父母に素直に甘えることができない。ラミーを〈生きづらさ〉を抱えた子どもに、永沢家の人々をそうした子どもと関わるおとなになぞらえながら読んでほしい。

野良猫だったラミーは、大雨に打たれて瀕死の状態になっているところを救われ、永沢家の一員として迎えられる（第51話「うちの子になりなさい」、第1巻 p.111）。永沢家でのラミーの生活を描いた1作目「お出迎え」(第60話、第1巻 p.129)では、仕事から帰ってきた父を迎える姉犬ラビとラミーの対照的な姿が描かれる（図1）。「ねえ？ ラミーは遠慮してるんじゃないかしら……」と心配する母に対して、父は次のように言う。「ラミーはお行儀がいいんだよ 見てごらん？ 三つ指ついて出迎えてくれるのは うちの家族でラミーだけだよ」(図2)。そして図3のコマで物語は終わる。

図1 「お出迎え」3コマ目



図2 「お出迎え」7コマ目



図3 「お出迎え」8コマ目



2作目「ラミーは？」(第80話、第1巻 p.169)では、父母と一緒に寝たいという姉犬ラビの願いを聞き入れる形で、父母が寝室に彼女のベッドを作る。他方ラミーは、3人がいる寝室に入ることをためらい、「らびさんよかったですね」とつぶやきながら、ひとり部屋の外で待っている。「ラミーはお母さんにだっこ」「それがいいよーまだ小さいもん」という母とラビのやりとりを部屋の外で聞いたラミーは、ラビのことをはじめて、「おねえちゃん」と呼ぶ（図4）。

図4 「ラミーは？」 8コマ目



3作目「大丈夫だよ」(第103話、第2巻 p.11)は、夜中にトイレに行きたくて父を起こそうとする姉犬ラビの姿から始まる。父が布団にもぐって目をつむったまま、「らび トイレ？ ラミーと行けば？」と応じると、「やだ ラミーはだめー」とラビは言う。この対話を聞いたラミーは、「私じゃ小さいもん それはお父さんがいいよ…」と落ち込む。しかし別の日、夜中にラミーがトイレに行きたがっていることをラビはすぐに察し、ラミーと一緒にトイレに行きながら、「いつでも起こしなよ。お姉ちゃんが連れてきてあげるから」と語りかける。寝室に戻る廊下で、「ラミーね、おねえちゃんすき…」と言うラミーに対し、ラビは、「お姉ちゃんはラミーのこともっと好きだよ」と応じる。

一話飛ばして5作目「ラミーは、いらない」(第275話、第3巻 p.177)では、姉犬ラビに洋服を作ろうとする母から、「ラミーはお洋服いらないのよ」と言われて落ち込むラミーの姿が描かれる。「おまいさんももうこの家の子なんだ。欲しいものは欲しいと言っていいのだぞ」と語りかける遠藤に対し

図5 「ラミーは、いらない」 5コマ目



て、ラミーは「いいの」と応じる。そうは言いながら、言葉と気持ちが裏腹なラミーの姿が描かれる(図5)。

翌朝、ラビの洋服と同じ布で作った首輪をもらったラミーは、父母から、猫は自分の毛で間に合うがラビのような犬は下毛がないために服が必要になる、ということをお教えられ安心した表情をみせる。

続く6作目「本当の子供 前後編」(第349・350話、第4巻 pp.145-147)では、ラミーの切実な気持ちが明かされる。どうしてもついて行きたいと言う姉犬ラビが濡れないようにと、彼女を背負って父は雪かきをする。道行く高校生が「犬しょって!!」と驚くと、父は、「子供！ 永沢家の子供だから覚えといて」と笑顔で返す。続く2コマが、図6と図7である。その後、ラミーも母に背負われて外に出る。この話は、母から高校生たちに「この子はまだ小さいから 孫」と紹介され、嬉しさと呆然とするラミーの表情で終わる。

図6 「本当の子供〈前編〉」 6コマ目



図7 「本当の子供〈前編〉」7コマ目



6作目までは、永沢家からの全面的な愛情を受けながら、それでもまだ自信が持てないでいるラミーの姿がくり返し描かれる。他方、7作目では、これまで優しさを受けとる側だったラミーが、優しさを与える側へと変化する。

7作目「守るよ」(第425話、第5巻 p.117)は、ラミーの、「あそこ [=母や姉犬ラビのいる場所]に行けば私も歓迎してもらえ、今ではそれがわかる、だから寂しくない」というモノローグから始まる。その後、庭で草むしりをしている父のところへラミーが行くと、草むらからカエルが飛び出してくる。父はカエルが怖くて動けなくなっており、「男のくせに駄目だねー」とラミーに向かって苦笑する。図8はその直後のコマである。表情や言葉から、ラミーの大きな変化がうかがえるだろう。

図8 「守るよ」7コマ目



3. ラミーに何が起こったのか

本節では、身体性にまつわる現象学の知見を手が

かりにしなが、1作目から7作目にかけてのラミーの変化について考えていきたい。

3-1 告知を可能にする雰囲気

・言語表現による意味づけと告知

言語表現は、対象を意味づける働きを持つ。と同時に、語り手の思いを聞き手に「告知」する働きも持つ (vgl. Husserl 1913/1970, S.33f.: p.43以下)。1作目を例にして考えてみよう。玄関の上り口に遠慮がちに座って出迎えるラミーの振る舞いに、父は、「ラミーはお行儀がいい」「三つ指ついて〔奥ゆかしく丁寧に〕出迎えてくれる」と表現することで、ポジティブな意味を与えている (図2)⁶⁾。と同時にこの言葉は、ラミーに対する父の愛情を、彼女も含めた永沢家の全員に告知している。父の愛情に裏打ちされたポジティブな意味が与えられることで、ラミーの振る舞いは、彼女自身も含めた永沢家の全員にとって、彼女のけなげさや父への思いを表す好ましい振る舞いになる。

・告知を可能にする雰囲気の内実

ここでさらに考えたいのは、対話において聞き手が、語り手の意味したいことを受けとれたり、語り手の感情や心境を感じとれたりできるのはなぜなのか、ということである。雰囲気という観点からみていこう。

哲学者のシュミッツによれば、私たちの気分や感情は、私たちの内部に留まっているわけではない。そうではなく、雰囲気として醸し出され、私たちのいる空間を満たしている。したがって、同じ場に複数の人がいる場合には、醸し出されたそれぞれの感情が混じり合い、ある場の雰囲気が生まれる (vgl. Schmitz1974)。

雰囲気として空間に醸し出される気分や感情は、教育現象学者の中田の言葉を借りて、自己被触発存在 (Selbstaffiziertsein) と言い換えることができる (cf. 中田1993)。自己被触発存在とは、「私がなす」という自己遂行それ自体によって触発されていることが、主題的にではないが、反省作用や統一的活動を可能とするような仕方、己自身に触知されている意識の存在のことである」(同, p.129)。語源学的考察によると情感 (Affekt) と触発作用 (Affizieren) に本質的な違いがないことから、気分とは、「己れ自身に感知されている自己被触発存在がそのつど

『～の気分』という言葉で表現されたものである」(同, p.133)、と言えることになる。

さらに、自己被触発存在は、『私がなす』という意識と共に機能しているキネステーゼ⁷⁾的身体活動により自己触発されている」(同, p.138)。キネステーゼ的身体活動は、主題的に知覚されている物体を奥行きと厚みをもった三次元の実在物として体験することを可能にする。と同時に、キネステーゼ的身体活動は、当該の物体を図として際立たせる地としての背景空間をあらかじめ構成している。こうした働きは「空間化作用」(同, p.140)と呼ばれる。重要なことは、ある空間内での実在物の現れと、知覚者のキネステーゼ的身体活動と、それらによって生起する自己被触発存在とがすべて一体的に調和している、という点である (cf. 同上; 中田2003, p.95f)。したがって、「この時の自我の自己被触発存在は、空間化作用と一体となっているだけではなく、キネステーゼ的身体活動と一体となってあらかじめ構成されている視野と共に、やはり空間化されている」(同上)、と言えることになる。つまり、「～の気分」という言葉で表現される自己被触発存在は、場の「雰囲気として〔略〕空間的に伸び広げられている」(同上) ことになる。これが、上述した気分や感情といった「情感」に備わる「空間性の超越論的根拠である」(同, p.139)。

・浸透的で双方向的な感情移入による自己理解と他者理解

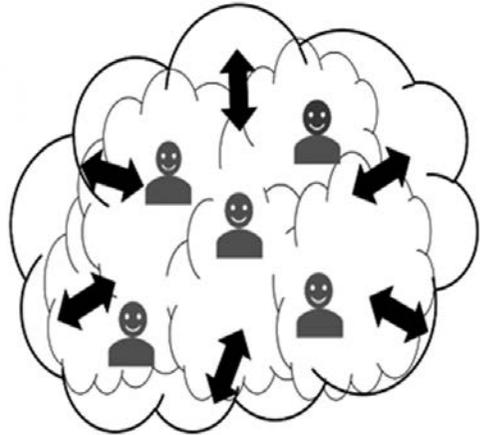
私たちは自己被触発存在である雰囲気を一方的に醸し出しているだけではない。「雰囲気にのまれる」、「雰囲気に浸る」といった言葉が示しているように、場の雰囲気は私たちのからだに自然と染みこみ、私たちの気分や感情状態に影響を与える⁸⁾。なぜこうしたことが起きるのだろうか。

上述したように、意識は、目覚めている限り自己触発され続ける。したがって、自己被触発存在も、常に醸し出され続けている。自己被触発存在は、キネステーゼ的身体活動による空間化作用と一体となって知覚空間に伸び広げられながら、そのつど今の知覚作用に影響を与えている。そのつど今の知覚作用が影響を蒙ることにより、当該の知覚作用によって触発されて醸し出される自己被触発存在に変化が生じる。このように自分ひとりの空間であっても、私たちは、場の雰囲気として自己被触発存在を

醸し出ししながら、当該の場の雰囲気から影響を蒙って自己触発される、という循環関係を生きている。

さらに、ラミーの物語で描かれていたように、ある空間(場)に複数人がいる場合について考えてみよう。こうした場合には、当該の場にいる人々それぞれが醸し出す雰囲気が混じり合い、一つの場の雰囲気が構成される(図9)。

図9 自己触発の循環



この場の雰囲気によって、当該の場にいる人々それぞれの自己触発され方が変わり、さらに異なる場の雰囲気が醸成され……、という循環が生じる。上述したように、自己被触発存在は、それぞれの人が醸し出している情感(主題化され言語的に表現されれば、「～の気分や感情」となる)である。すると、ある場にいながら当該の場の雰囲気を感じているとき、私たちは、その場にいる他者(たち)の自己被触発存在(=情感といった意識活動)を受動的かつ非主題的に感知していることになる。筆者は、こうした場の雰囲気を媒介として、身に染みる(浸透的な)かたちで他者を受動的かつ非主題的に感じとってしまう在りようを、浸透的で双方向的な感情移入⁹⁾と名付けた (cf. 大塚2009)。

浸透的で双方向的な感情移入によって感知された場の雰囲気は、(能動的な)知覚、認識、反省といったさまざまな意識活動を経て、能動的かつ主題的に言語化される。こうした言語化によって、「あの人は今日機嫌が悪いようだ」とか、「私はこういう雰囲気の場合になじみやすい」といった自覚が、すなわち、自己理解や他者理解の素地が作られる¹⁰⁾。

・ラミーに影響を与えた永沢家の雰囲気

以上の考察からすると、言葉表現に備わる告知の働きを、雰囲気の観点から次のように説明できる。語り手の語り方、声色、表情、振る舞いといった身体活動から、彼／彼女の意識活動が雰囲気として醸し出される。その雰囲気は、聞き手のからだに自然と染みこむというかたちで、聞き手に受けとられる(浸透的で双方向的な感情移入)。受けとったその雰囲気を(無意識に)拠りどころとして、聞き手は、語り手の情感や、語り手が意味しようとしていることを感じとる。

ラミーの物語に即して具体的にみていこう。永沢家の人々は、ラミーの遠慮がちな振る舞いに、彼女のけなげさや可愛らしさというポジティブな意味を与え続けた。と同時に、「あなたは小さくて愛らしく、守られるべき存在だ」というポジティブなメッセージを、「小さい」(2作目「ラミーは?」)、「孫」(6作目「本当の子供」)といった言葉に加えて、抱きしめる(1作目「お出迎え」)、寄り添う(3作目「大丈夫だよ」)、背負う(6作目「本当の子供」)といった振る舞いによって身をもって伝え続けた。さらに注目すべきは、1作目から6作目を通して、永沢家の人々が、常に笑顔でラミーに接している点である。図3を典型例として、永沢家が集う場には笑い声が絶えない。言語表現による意味付与(=能動的かつ主題的な働きかけ)と、さまざまな振る舞いから醸し出され身に染みてくる雰囲気(=受動的かつ非主題的な働きかけ)という二つの次元で、ラミーは、永沢家の人々の愛情を日々の生活のなかで受け続けている。これらのおかげで、自分自身と他者に対するラミーの見方が、少しずつポジティブなものへと変わっていった、と考えられるのである。

3-2 一方向的な感情移入による他者理解

・一進一退するラミーの変化

第2節の最後に紹介したとおり、ラミーは7作目にして大きな変化を遂げる。逆に言えば、6作という長い期間にわたって、ラミーはなかなか変わることができなかった。

上述したように、玄関の上り口に遠慮がちに座って出迎える振る舞いに、ポジティブな意味づけをもらい(1作目「お出迎え」)、「小さい」から母に抱っこされて眠ることになり、姉犬ラピを「おね

えちゃん」と呼べるようになり(2作目「ラミーは?」)、深夜のトイレに付き添ってくれた姉犬ラピに「ラミーね、おねえちゃんすき…」と言えるようになる(3作目「大丈夫だよ」)。このように3作目までのラミーは、順調に永沢家の一員になりつつあるようにみえる。

しかし5作目「ラミーは、いない」では、「ラミーはお洋服いないのよ」という母の言葉に傷つき、「ラミーはお洋服いない、うん、いない」といじけるラミーの姿が描かれる(図5)。上述したように、ラミーは首輪をもらい、母が洋服に関して姉犬ラピとラミーを差別したのではないことが明らかになる。しかし、6作目「本当の子供」でも、相変わらずラミーは、父母に遠慮がちな様子みせる。「らびお姉ちゃんはこの家の本当の子供だからわがまま言ってもいいと思う……」という言葉からは、自分は永沢家の本当の子供でもないため、わがまを言うてはいけないとラミーが感じていることが透けてみえる。実際、「自分は本当の子供じゃないからと遠慮するのか?」という遠藤の問いかけに対し、ラミーは、「嫌われたくないの。お父さんとお母さん大好きだから絶対嫌われたくない」と切実な思いを吐露する。上述したように、その後ラミーも母に背負われて外に出て、母から高校生たちに「この子はまだ小さいから孫」と紹介され、嬉しさと呆然とするラミーの表情でこの話は終わる。

・疑似的な自己として現れてくる他者

このように1作目から6作目まで一貫してラミーは、言語表現による意味付与(=能動的かつ主題的な働きかけ)と、さまざまな振る舞いから醸し出され身に染みてくる雰囲気(=受動的かつ非主題的な働きかけ)という二つの次元で、永沢家の人々の愛情を受け続けている。「場の雰囲気に流される」「場の雰囲気に呑まれる」といった経験的事実が示しているように、雰囲気(自己被触発存在)は、身に染みる(浸透的)という仕方、私たちの在りように直接影響を及ぼしうる。すると、意識され言語化される能動的かつ主題的な働きかけよりも、受動的かつ非主題的な働きかけの方が直接的で影響力が強いように感じられてしまう。しかし、受動的かつ非主題的な働きかけは、自我が関与することのない次元への働きかけである。例えば、場の雰囲気に流されたり呑まれたりしている当事者が、そのときに

も事後的にも自分の置かれている状況に気づかないままの場合もしばしばあるだろう。このように受動的かつ非主題的な働きかけは、受け手の自我が関与することのない次元への働きかけであるため、受け手によって適切に言語化されなければ意識されないまま流れ去ってしまう。他方、能動的かつ主題的な次元は、他者からかけられた忘れられない言葉が誰しもにあるように、言葉と自我が関与している次元であり自覚されやすい。

こうした能動的かつ主題的な次元における他者理解を、筆者は、「一方向的な感情移入」¹¹⁾と名付けた (cf. 大塚2009)。身に染みる (浸透的な) かたちで他者を受動的かつ非主題的に感じとってしまう在りようである「浸透的で双方向的な感情移入」とは対照的に、一方向的な感情移入は、「私が他者の立場だったならば」というように、自分を基準として能動的かつ主題的に他者を捉えようとする在りようである¹²⁾。したがって、一方向的な感情移入によって捉えられる他者は、私とは異なる他者ではなく、「私自身の〔他者観や世界観の〕反映」や「類似物」、つまり疑似的な自己に過ぎないことになる (vgl. Husserl 1950/2001, S.94 :p.170)¹³⁾。

以上の考察をふまえると、1作目から6作目までのラミーは、一方向的な感情移入によって永沢家の人々を自分自身の反映として捉えている、と言える。「元・野良の拾われ猫だからなあ……。辛酸をなめて育てるから」という遠藤の言葉¹⁴⁾が示しているように、ラミーにとって、他者も世界も彼女を脅かす存在である。だからこそラミーは、言語表現による意味付与 (= 能動的かつ主題的な働きかけ) と、さまざまな振る舞いから醸し出され身に染みてくる雰囲気 (= 受動的かつ非主題的な働きかけ) という二つの次元で、永沢家の人々の愛情を受け続けているにもかかわらず、その愛情を心から信じ切ることができない。永沢家の一員になっても、ラミーにとって他者と世界は、自分を脅かしかねない存在であり続けている。

自分は父母と姉犬ラビと同じ寝室では眠れないと思ひ込むのも (2作目「ラミーは?」)、ラビが夜中のトイレに自分を一緒に連れて行かないことに、「私じゃ小さいもん それはお父さんがいいよ…」と落ち込むのも (3作目「大丈夫だよ」)、姉犬ラビとは違って自分には洋服を作ってもらえないと落ち込むのも (5作目「ラミーは、いらない」)、

自分は永沢家の本当の子供ではないからわがままを言ったら父母に嫌われてしまうと思うのも (6作目「本当の子供」)、すべてはラミーが、〈自分を脅かし傷つけかねない存在〉という他者観・世界観を、永沢家の人々に反映させているからである。しかし永沢家の人々は、すべてのエピソードにおいて、他者と世界が信頼に足るものであることを、上述した二つの次元で示し続ける。永沢家の人々が、ラミーへの教育的・ケアの意図をもってそのように振舞っているというよりは、彼らにとって他者や世界が現れてきているままに、つまり、彼らにとって他者や世界が十分に信頼に足るものだからこそ、意図せずともそうした振る舞いになるのだろう。

上述したように、受動的かつ非主題的な働きかけは、受け手の自我が関与することのない次元への働きかけであり、受け手によって適切に言語化されなければ意識されないまま流れ去ってしまう。だからこそ、雨水が地層にゆっくりと染みわたっていくように膨大な時間をかけて、しかも時間がかかった分だけおそらく強固なかたちで、他者と世界を信頼する永沢家の在りようがラミーに浸透し、彼女は変容へと誘われていった、と考えられる。

4 〈おのずと伝わること〉の教育的意義

7作目は、ラミーのモノログからはじまる (図10)。

図10 「守るよ」1・2コマ目



「今ではそれがわかる」(傍点引用者)と言うとき、ラミーは、頭で、つまり能動的かつ主題的な次元でわかっているだけではなく、受動的かつ非主題的な次元で身に染みてわかっている、と言えよう。7作目にしてようやく、他者と世界が充分信頼に足るものであることが、ラミーの「腑に落ちた」と言えよう。「今では」という言い方が示しているように、ラミー自身が、自分の変化を感じ取っている。〈自分を脅かし傷つけかねない存在〉という他者観・世界観からラミーはすでに解放されているため、「こんなことを言ったらお父さんに引かれたり、嫌われたりするのではないか」と従来のように思い悩むことなく、「ラミーはお父さんが一番好き」「大丈夫！お父さんはラミーが守るよ」と、自分の真っすぐな思いを父に伝えられるようになっていく。

本稿でここまでみてきた永沢家とラミーの物語は、伝達や指導といった能動的かつ主題的な働きかけが注目されることの多い教育という営みの、見過ごされがちな側面に光を当ててくれる。永沢家の日々のなかで誘われたラミーの変容は、対人関係において身体が媒介する受動的かつ非主題的な働きかけが持つ教育的意義を示している。つまり、能動的かつ主題的に働きかける(伝える)ことと同じかそれ以上に、受動的かつ非主題的な次元で身に染みのかたちで〈おのずと伝わる〉ことが、他者(教育される者、ケアされる者等々)に変容を促しうる、という可能性を示している。

1-2ですでに触れたとおり、現象学的には、能動的かつ主題的な働きかけと、受動的かつ非主題的な働きかけ(働きかけてしまうこと/働きかけられてしまうこと)は、分離した対照的な二つの働きかけではない。そうではなく、能動的かつ主題的な次元での働きかけは、受動的かつ非主題的な次元での働きかけ(おのずと伝わること)に支えられている。したがって、これまで見過ごされがちであった受動的かつ非主題的な次元に注目することにより、能動的かつ主題的な次元もより深く解明できるはずである。本稿冒頭で述べたように、オンライン・コミュニケーションによって身体性が捨象されがちな現在だからこそ、逆説的に、私たちに備わる身体性や、身体が媒介する受動的かつ非主題的な次元に注目する意義がある。

最後に、今後に残された二つの課題について述べることで本稿のまとめとしたい。本稿で事例として

取り上げた永沢家の人々は、言語化されない受動的かつ非主題的な次元のみならず、能動的かつ主題的な次元における働きかけでさえ、意図的に行っていないようにみえる。3-2で触れたように、永沢家の人々にとって他者と世界が常に十分に信頼に足るものとして現れてきているからこそ、そうした彼らの一挙手一投足が、ラミーに対するポジティブな働きかけとして作用したと考えられる。

他方、上述したように教育においては、伝達や指導といった能動的かつ主題的な働きかけが注目される。しかし、ラミーの変容が示しているように、受動的かつ非主題的な次元における無意識的な働きかけにも目を向ける必要がある。永沢家の人々の無意識的な在りようを分析することは、受動的かつ非主題的な次元と能動的かつ主題的な次元双方において他者に効果的に働きかけるための方途を明らかにすることにつながる。この解明結果を、教育する者の専門性¹⁵⁾の一種として定式化できるはずである。これが一つ目の課題である。

もう一つの課題は、ラミーがなぜどのように変容したのかを、深く掘り下げることである。6作目まで一進一退の状態にあったラミーは、7作目で大きな変容を遂げる。本稿では、受動的かつ非主題的な働きかけは受け手に自覚されにくいことを、ラミーの変容に時間のかかった理由とした。「身に染みる」「腑に落ちる」という慣用句の語感からイメージされるように、自覚されにくいことが浸透的に伝わって受け手を確かな変容へと誘う過程について、さらに考えていきたい。

7作目以降のラミーは、「大丈夫！お父さんはラミーが守るよ」という言葉が典型的に示しているように、永沢家の人々によってケアされ庇護される者から、永沢家の人々をケアし庇護する者へと変化を遂げている。本稿では触れなかったが、8作目(第426話「おいでね」、第5巻 p.119)では、永沢家の人々を超えて、見知らぬ野良猫をケアするラミーの姿が描かれている。ケアされ庇護される者が、周囲の働きかけによって変容を遂げた際、ケアし庇護する者へと変化するのとはなぜなのかという問いについても、今後の課題として考えていきたい。

【引用文献】

遠藤野ゆり・大塚類『さらにあたりまえを疑え：臨床教育

学 2」、新曜社、2020年。

深谷かほる『夜廻り猫』第1巻～第6巻、講談社、2017年-2020年。

Heidegger, M. 1971 *Erluterungen zu Hlderlins Dichtung*, Vittorio Klostermann, 5.Aufl. 1971: 『ハイデッガー全集 第4巻 ヘルダーリンの詩作の解明』創文社、1997年。

Husserl, E. *Logische Untersuchungen Bd.2*, Max Niemeyer, 1913: フッサール, E. 『論理学研究 2』(立松弘孝ほか訳)、みすず書房、1970年。

Husserl, E. *Cartesianische Meditationen und Pariser Vorträge*, Martinus Nijhoff, 1950: 『デカルト的省察』(浜渦辰二訳)岩波書店、2001年。

木田元他編著『現象学事典』弘文堂、1994年。

中田基昭『授業の現象学: 子どもたちから豊かに学ぶ』東京大学出版会、1993年。

中田基昭「身体による世界の構成」中田基昭編著『重症児の現象学: 孤立した生から真の人間関係へ』川島書店、2003年。

大塚類『施設で暮らす子どもたちの成長: 他者と共に生きることへの現象学的まなざし』、東大出版会、2009年。

Schmitz, M. *Das leibliche Befinden und die Gefühle, Zeitschrift für philosophische Forschung*, Nr28, 1974.

註

- 1) 現象学における受動的・受動性という表現は、通常用いられるような「受け身」という意味ではなく、本文中でも記述しているように、自我の関与なしにおのずと生起する、という意味をもつ。したがって、本文中で述べているように「受動のかつ無意識的な働きかけ」、つまり、自我の関与なしに相手に働きかけてしまうことや、働きかけられてしまうことが成立する。
- 2) マンガ作品が事例研究の対象として十分な内実を備えていることを、マルティン・ハイデッガーの思索を手がかりとして以下に示す。ハイデッガーによれば、詩人とは、神々と人間との間へと投げ出されている者である。「詩人が発語することは、神々の目配せ(Wink)を受け取ることであり、この目配せをさらに人々へと目配せするためである」(ハイデッガー1971/1997, S.46: p.61)。この神々の目配せとは、すべての存在者を「根源的に収集すること」と表現されるLogos(大文字のロゴス)だと言える(vgl. Heidegger 1954)。さらに、「アレータイア〔非秘蔵性=真理〕と……Logosは同じものである」(aa.O., S.371: p.407〔〕内引用者)という記述をふまえれば、Logosは

- 真理であることになる。詩人といった特別な人間だけが、Logosすなわち存在者の真理に聴従し(homologein)、それを作品というlogos(小文字のロゴス)として発語することができる。特別な人間ではない私たちは、logosとして結実した存在者の真理に触れることができるのみである。ハイデッガーによる以上の思索をふまえれば、マンガもそこに含まれる芸術作品は、特に、多くの人々に受容されている芸術作品は、存在者の真理を描き出していることになる。したがって、マンガ作品であっても事例研究の対象として十分な内実を備えていると、それどころかむしろ、存在者の真理を結晶化させている芸術作品は事例研究の対象にふさわしいとさえ、言えるはずである。
- 3) 本稿では〈教育的関係〉を、ひとが受容へと誘われるような関係というように広くとらえている。したがって、ほとんどすべての人間関係を教育的関係とみなすことができる。
 - 4) 『夜廻り猫』は、第21回手塚治虫文科省短編賞を受賞し、2019年末で累計47万部を突破したベストセラーである。主人公は、縦縞のどてらを着て頭に缶詰を乗せている野良猫の遠藤平蔵である。『夜廻り猫』シリーズは、主人公の遠藤を中心として、ワカルとさっちゃん、宙さんと先生、モネと飼い主など、サブキャラクターの話が展開する。本稿で事例として取り上げる永沢家とラミーもそのひとつである。
 - 5) 『夜廻り猫』の世界観に合わせて、本稿でも動物を擬人化して記述する。
 - 6) 以下、本文中の〔〕は引用者による補足を意味する。
 - 7) キネステーゼ(Kinästhesie)とは、ギリシア語のキネーシス(運動)とアイステーシス(感覚)とから合成されたフッサールの術語である(木田他1994, p.89以下)。本文中でも記述しているとおり、キネステーゼの身体活動と物体の現れとの一体的調和が、ある物体をリアルな実在物として、すなわち存在意味と存在妥当性とを備えた実在物として知覚することを可能にしている(cf.大塚2009, p.136)。
 - 8) 雰囲気(の変化)に敏感な人もいれば、鈍感な人もいる。「空気が読めすぎてしまってしんどい」「空気が読めない」といった日常的な表現は、気分や感情と場の雰囲気との循環的な関係を表していると考えられる(遠藤・大塚2020, 第五章, 終章参照)。
 - 9) 本文中でも述べたとおり、私たちは雰囲気として感知される自己被触発存在を醸し出しながら、当該の場の雰囲気から影響を蒙るという循環関係を生きている。こうした在りようを、双方向的と表現した。後述する一方向

な感情移入との対比でもある。

- 10) 場の雰囲気成立状況からして、当該場で受動的かつ非主観的に感知される雰囲気は、自己と他者の自己被触発存在が混じり合ったものである。こうした未分化かつ匿名的な自己被触発存在が、さまざまな意識活動を経て能動的かつ主観的に自覚され言語化される際に、自己の状態と他者の状態に分岐すると考えられる。
- 11) 一方向的な感情移入は、フッサールが『デカルト的省察』の第5省察で展開した「感情移入 (Einfühlung)」概念を参考にしている。第5省察においてフッサールは、間相互主観的 (intersubjektiv) という意味での客観的世界の構成について説明するために、他者に関わる意味をすべて捨象した原初的世界における他者構成について考察している。感情移入は、自己が他者を構成する際の重要概念である。
- 12) 本文中では「対照的に」と描写したが、一方向的な感情移入と浸透的な感情移入は相反するものではない。上述した現象学的思考に基づけば、受動的かつ非主観的な次元における浸透的で双方向的な感情移入と、能動的かつ主観的な次元における一方向的な感情移入は、前者が後者に基づけている (支えている) 関係にある、と考えられる。日常生活における他者経験や他者理解において、一方向的な感情移入と浸透的で双方向的な感情移入は相補的な関係にある、と考えられる。
- 13) 疑似的な自己として捉えられながらも、私自身とは異なる自我 (他我) である他者の複雑さを、フッサールは以下のように表現している。「他者は私自身の反映である。しかし、とは言いながら、本来的には反映とは呼べない。あるいは、私自身の類似物である。しかし、とは言いながらやはり、普通の意味での類似物ではない」 (Husserl1950/2001, S.94 : p.170)。
- 14) 1作目「お出迎え」5コマ目 (第1巻, p.129)。
- 15) 専門性とは本来、学びによって習得されるものである。だからこそ、永沢家の人々のように (意識的・無意識的に関わらず) 専門性を発揮している人々の在りようを分析し、その構造を説明することにより、自覚的に習得するための方途を探ることができる。